

目標分解表における「中目標」とは： 社会とつながりを担保する目標

山崎直樹（関西大学）

2020.8.14, ver.0

A. これまでの説明

これまで、〈目標分解表〉の3段階の目標について、以下のような説明をしてきました。

大目標：プロジェクト全体のゴール

中目標：プロジェクト全体の里程碑になるように配置されたゴール

小目標：日々の授業の活動のゴール

	タスク	小目標	中目標	大目標
言語表現	日々の授業で与えられる個々のプレコミュニカティブな活動。	個々の個別的な言語表現の伝達機能に焦点を当て、それが運用できるかどうかを示す目標。	明確な構造を持つ談話、社会的な役割を担って行われる談話など、個別的な言語表現を統合した高次の言語表現を運用できるかどうかを示す目標。	プロジェクト全体の目標。教室外の社会との連携や、新しい人的ネットワークの構築に、積極的に関わる目標が望ましい。
言語表現以外	日々の授業で行う段階を追った活動。	中目標の成果物を作り上げるためにクリアしなければならない知識の獲得、調査、分析、報告、制作活動の目標。	あるジャンルのメッセージを伝える成果物を残すことが可能な目標。 例: 何かの違いを分析したレポート、何かを紹介するパフォーマンス、歓迎の気持ちを表現するカードや飾り付け……	

B. 中目標と小目標についての補足：社会性

これにもう少し補足をします。

B-1 中目標とは社会性のある目標である

「中目標」とは、ひとことでいえば、「社会的な目標」です。社会的に（＝現実の世界の人との交流において）意味をもつメッセージを発する／受け取ることができるかという観点で設定された目標です。言語表現を例にとって考えてみましょう。

（ある特定の場面で）初対面の人に自己紹介をするというのは、社会的に意味をもつ行動です。われわれは、社会生活の中で、いつどのようにそれが行われるか想像をすることができます。ですから、これができるかどうかという目標は、「社会的な目標＝中目標」と考えます。

B-2 小目標とは教室内での学習のための目標である

いっぽう、この「初対面の人への自己紹介」は、どのような言語行動を含むかという点、「知らない人に声をかける」「自分の名前を伝える」「自分の身分を伝える」などから構成されるでしょう。これらの行動は、それだけでは、「社会における行動のどこに位置するかわかりにくい」「他の行動とセット

にしないとどんな場面での行動か、具体化しにくい（＝言語表現の選択が具体化しにくい）」と感じられることでしょう。「中目標」を達成するために、教室での学習という限定された場でおこなう言語活動だからです。このような学習のための言語活動の目標を「小目標」と考えます。

B-3 言語表現以外の活動

同様のことが、言語表現以外の活動にもいえます。何かを調べて書いた報告でも、教室外の人を読んで理解できるような内容・体裁の報告であれば、それは社会性のあるメッセージです。ですから、それを作成することを目標にしたばあい、それは「中目標」です。

いっぽう、そのような報告を作成するためにおこなう調査の結果をクラス内での共有するために発表するとしたら、その発表は十全のものではなく、何も前提としていない人は、それだけを見ても、意図を正確に把握できないかもしれません。でもそれは問題ではありません。そのような発表は、教室内の学習のための活動ですから。そのような活動の目標を「小目標」とします。

B-4 何が中目標の必要性を決めるか

よく、「大がかりな学習プロジェクトを考えていないので、3段階の目標は要らないと思うのですが……」という質問をされます。しかし、3段階の目標が必要かどうかは、学習プロジェクトが大がかりかどうかでは決まりません。「社会性」つまり「教室の外とのつながり」をどれだけ意識するかで決まります。つまり、「中目標」とは、「社会とのつながりを担保するための目標」であるということです。このことを理解していただきたいと思います。